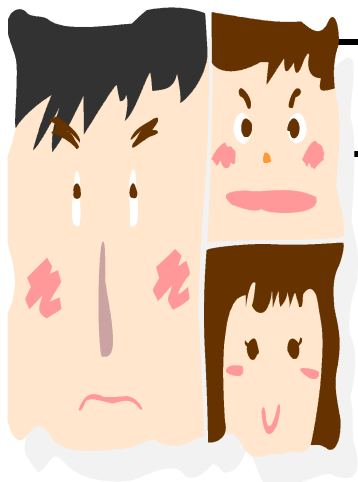


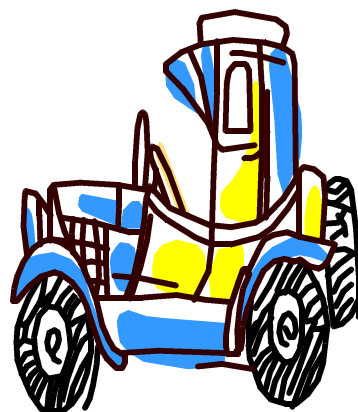


暴走族親衛隊長は今 … 畔下君(仮名)のこと

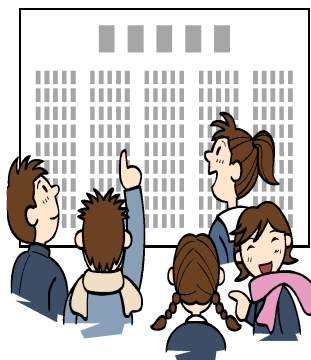
□畔下君からは今でも時々携帯に電話がかかってくる。「上の子どもが学校でいじめられているらしい。青仁(あおじん、私につけられていたアダナ)先生、どうしたらいい…」などという、すっかり一人前の父親をしている畔下君の相談に、思わず笑ってしまう…。私が新潟の薄汚い教員住宅に住んでいた時分、例によって、暴走族の子分を引き連れては、4000ccの真っ黒いクラウンで住宅の前に乗りつけ、よく遊びに来たものだ。同じ教員住宅の住人は、「青木さん

さんがヤクザか何か、いかがわしい人たちにゆすられているらしい…」などと、勝手に想像し、好奇と無関心を装った視線を、畔下君と彼らを出迎えた私に一斉に浴びせかけたものだった。

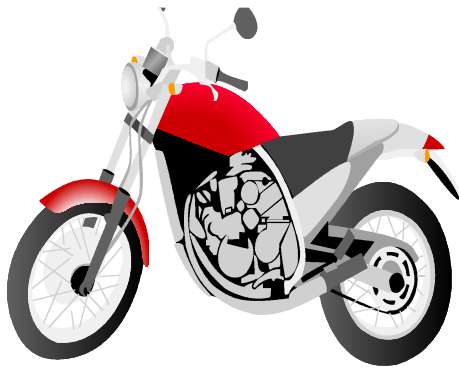
□畔下君は今47歳。体重90kgを超える巨漢で、柔道3段の腕前。顔も厳つく、切れ長の細目、口髭を蓄え、パンチパーマのスポーツ刈り、見るからにヤクザを思わせる風体で、一緒に歩いていると、すれ違う人は必ずと言っていいほど、彼を避けて通る。しばらく前までは、東京都内の警備保障会社に勤めていたが、今は地元に戻り、ダンプの運転手をしている。20年ほど前に素敵な彼女と結婚して、2児の父親として、子育てに悩みながらも、堅実な家庭を築いている。時々畔下君に誘われたり、誘ったりして、彼の姉さんのやっているスナックにお邪魔しては、一緒に一杯やることもある。



□畔下君は私が初めてM中学校に赴任した年、2年5組にいた。その頃の私はまだ駆け出しの新米教師で、恐る恐る彼のクラスで社会科を教えていた。その2年生の中で、畔下君は一際目立つ不良グループのリーダーとして名を馳せていた。T君、Y君、M君、I君などは彼のグループの有力メンバーだった。新米である私の授業などは、彼らのいるクラスではほとんどまともに成立したことがなかった。彼らは校舎内外でいつもとんでもないことをしでかしては、私たち教師を悩ませていた。翌年、私はM君がいた3年1組の担任になったが、M君が父親と流血の死闘を繰り広げていた家庭に、優に100回は足を運んだ。3年の卒業間近になった頃、高校に進学したいと言いだし、この5人は県立Y高校などを受験したが、合格発表の朝、高校の合格掲示板の前で、他校生と大乱闘事件を引き起こしたり…。案の定、全員不合格となった。



□その後、この5人のうち4人は県立M高校定時制に進んだ。4年の定時制課程を(5年かけて)無事卒業したのは、畔下君



ただ一人であった。T君は中学を卒業して間もなく行方不明となり、M君は高校1年で中退、まもなく結婚したものの直ぐに離婚し、引き取った子どもの育児に追われ、今も定職に就かずブラブラしている。Y君は地元の暴力団の組員になり、傷害事件を起こして服役した後、また数年前、今度は高校生を殺めて、現在も服役している。I君も地元の暴力団の組員になり、拳銃不法所持や傷害事件を起こしたりして、いまだに更生できずにいる。

□当時、畔下君たちとは数え切れないほどの喧嘩もしたし、様々な対立もあったが、なぜか私は彼らが好きだったし、彼らも私を好いていたらしく、よく私の家に遊びに来ていた。中学卒業後、バイクの免許を取り、地元の暴走族グループの親衛隊長に畔下君が就任した時などは、深夜、私のアパートに30人近い隊員を連れてきたこともあった。慌てる私をしり目に、妻や幼い子どもたちが大はしゃぎしていた。その時の奇妙な光景を今でも鮮明に覚えている。以来、私の妻や二人の娘は優しい畔下君の大ファンになってしまい、私はほとんど閉口させられているのだが…。



□しかし、畔下君はそんな中にあっても、決してとことんまで崩れることはなかった。47歳を過ぎた今になっても、彼の中学時代の友人のT君、Y君、M君、I君らが、そろいもそろって人の道を踏み外し、その贖（あがな）いをしているにもかかわらず、彼だけが一人まっとうな人生を歩んでいる。彼の結婚式に招待された折り、祝杯を注ぎに来てくれた彼に、思い切って私の長年の疑問をぶつけてみた。「哇（あぜ、畔下君のアダナ）が、とことんまで崩れなかった理由は何だ？」と…。すると、「強いて言えば、俺（おれ）が中2の時、事故って死んだ兄貴のことと親が厳しかったからかな…」と、畔下君はぼそぼそとつぶやいた。「肉

親の死と親子の絆（きずな）が彼を救ったということか…」私も心の中で彼の答えを反芻（はんすう）した。畔下君の親バカぶりに感じ入るにつけ、T君、Y君、M君、I君らのことが脳裏（のうり）を過（よ）ぎる。“たかが教師、されど教師”などと自嘲（じちょう）しながら、教師としての無力さや責任を今も感じたりして、憂鬱（ゆううつ）な気分になってしまう。

□と、突然、また、畔下君から携帯に電話がかかってきた…「青仁（あおじん）先生、日本の初代天皇は誰だったっけ…？」青木：「何だそれは…？」畔下君：「昨日会社の新年会の余興クイズに出たけど、誰も分からなかったが。先生は社会の教師だから知っていると思って電話したがあてえ〜」青木：「そっか、答えは神武天皇…」畔下君：「先生、有り難う、元気で、それじゃまた…」…そんなことぐらいで、いちいち俺（おれ）に電話を寄越すなど、怒鳴ろうと思ったが、いつまでも中学の社会科教師と慕われる幸せは何にも代え難い。次は江戸幕府の歴代将軍でも覚えて、畔下君の難問珍問に即答できるようにしておくか？！また、電話来ないかなあ〜。何でも即答してやるゾ！俺（おれ）は社会科教師だからな、などと思ったりしている自分をつい笑ってしまうのだが。教師というこの何とも奇怪な職業の喜びと悲哀と…。

